

# 希望 21

ありふれたことだけど  
かけがえのない  
希望がここにある

People's Hope for 21 century

平和・自治・共生

1997年 1月号

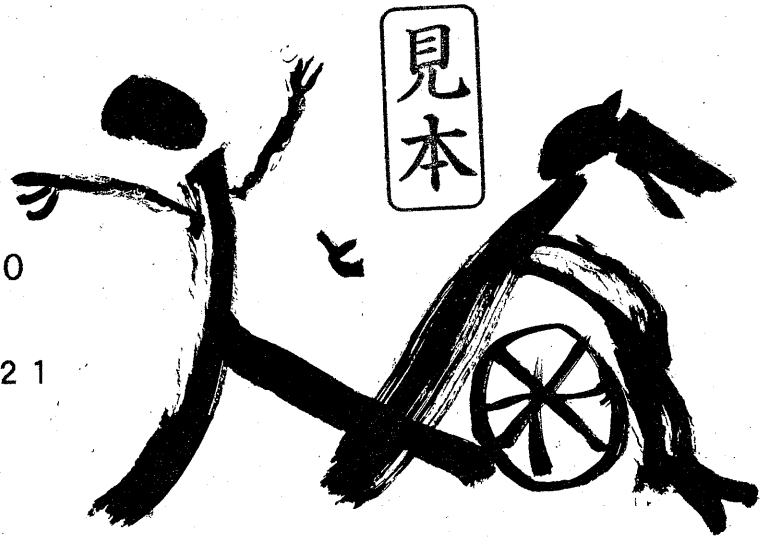
No.16

1部 200円 年間購読 3000円

神奈川県相模原市上鶴間2973-3-110

TEL & FAX 0427-40-4794

郵便振替：00100-1-97125 希望 21



## 橋本行革に対峙する地域の闘いをつくっていこう！

### 日本社会の全面的な改造を狙う橋本行革

マスコミがこぞってもてはやす「財政構造改革元年」の年が明けました。昨年の総選挙では、行政改革の実現が争点となり、各党とも省庁の整理統合と規制緩和を訴えました。橋本首相は第二次内閣発足にあたって、行政改革に自らの政治生命をかけると言い切り、「火だるま」内閣と位置づけ、首相直属の行政改革会議を設置しました。そこでは、

- ① 21世紀における国家機能の在り方
- ② 中央省庁の再編
- ③ 首相官邸強化

の三つの課題について審議、必要な法案提出を98年の通常国会に提出、成立させ、2001年に移行を目指すことを明らかにしました。メンバーには、諸井日経連副会長（地方分権推進委員長）、飯田三菱重工相談役（行政改革委員会委員長）、豊田経団連会長といった財界のオピニオンリーダーや渡辺読売新聞社長、川口NHK会長らマスコミ最大手の人材を取り込み、トップダウンの世論づくりを強力に進めようとしています。また一方で、自民党行政改革推進本部長に佐藤孝行、行革担当相に武藤嘉文といった中曽根側近を据え、極めて中曽根色の強い行革を進めようとしています。この行政改革会議で話される、国の役割の見直しやスリム化、規制緩和、地方分権、地方行政改革

といった内容は、日米安保の再定義や有事法制化を含めた自衛隊の機能強化と一体となった21世紀の日本の国家の在り方や社会の在り方を決定づけるものといっても過言ではありません。それは、中曽根が行った国鉄解体をはじめとする「戦後政治の総決算」の規模をはるかに上回る「日本の国家・社会の全面的改造」とも言えるものです。

橋本行革の性格は、97年度予算政府案にもはっきりと現れています。そこでは、消費税の引き上げや特別減税の打ち切りなどで、増税額は7兆円にも達し、一世帯当たり14万円もの負担増となっています。軒並み社会福祉予算を削減する一方で、防衛費は政府が別途措置とした沖縄・特別行動委員会（SACO）を除いても、4兆9414億円にも上り、SACO関連費を含めると、前年度比2.11%増にもなる飛び抜けた予算をつけています。SACOの97年度経費は、米軍の実弾射撃訓練の本土移転費以外は調査費であり、98年度以降飛躍的な大きな伸びになるのは間違いありません。橋本内閣は、今回の予算を「一般歳出の伸びを1.5%に抑えた」と自賛していますが、社会保障やサービスを受益者負担に転換し、人々の暮らしを切り捨てる一方で、安保再定義に基づく軍事強化を着実に推し進めていこうとする姿勢は明らかです。

昨年12月20日に出された地方分権推進委員会の第一次勧告「分権型社会の創造」でも、機関委任事務の廃止を全面に打ち出すことで、中央省庁の整理再編を促し、その一方で外交・国防に関する機関委任事務を温存し、首相官邸の権限強化を進めようとしています。これは、中曽根などが主張していた「アメリカ大統領並の権力を持つ」首相府をつくり、新たな世界統合システムの中で、「有事」に対応する体制確立と同じ質を持ったものです。米軍用地の強制使用手続きに関して、事務区分を先送りし、国の直接執行事務への含みを残すなど、住民の平和の意思を国家が強制的に踏みしめる性格が色濃く反映されています。

### グローバリズムが強制する行革・国家改造

こうした橋本行革の背景には、70年代に世界的に顕著になったスタグレーション（インフレ下の不況）の打開策として登場してきた新自由主義政策というものがあります。これは、経済を市場制度の自由にゆだね、民間活力を活性化することで、国家の障壁を無くしていくと言うものです。ここには、資本の自由競争が人々の暮らしや平和の在り方などを決定し、支配していくという危険な流れがあります。事実、アメリカ、日本をはじめとした資本主義各国が新自由主義を標榜し、実際にやってきたことは、それまでのケインズ主義経済のような計画経済を捨て、金融を自由化し、資本のグローバル化を加速させ、民営、行革、規制緩和を合い言葉に、本来、国民を守るべき筈であった国家機能を切り捨て、資本の競争主義の下に全てのシステムを世界的に統合することでした。

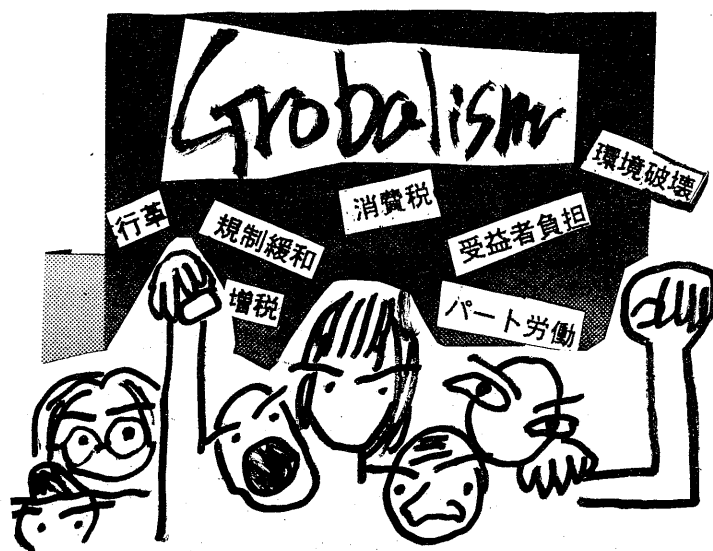
米のレーガン政権、英のサッチャー政権、日本の中曽根政権などが歴史的に果たした役割は、まさにこうした新自由主義の下に世界的な支配構造を政治、経済、軍事面から作り出すことでした。日本においては国労の解体攻撃と共に国鉄の民営化が進み、英では福祉国家の真髄とも言われた公営住宅政策が廃止になりました。労働組合の右傾化や社会党の解体、終身雇用の見直し、差別賃金・能率給の導入、本職雇用から、派遣、パート労働へといった流れも、この一環として進められました。金持ち優遇税として悪名高い消費税の導入も、所得税軽減の穴埋めとして強行されました。受益者負担の考え方を徹底させて、民営化、規制緩和を図り、福祉財政から様々な社会サービス予算をカットしていく在り方は、現在多くの資本主義国家の共通した政策となっています。また資本のグローバル化は、そうした政策を全ての国家に強制するようになっています。

そうした新自由主義の圧力は、特に第三世界の国家主権をも制限し、グローバリズムの下に国家自体を改造し、国境を越えた支配を強め始めています。その端的な

例が、世界銀行の年報報告に盛り込まれようとしている「世界開発報告」です。そのタイトルは「変わり行く世界における国家」と緩やかな表現になっていますが、内容は債務危機に見舞われた途上国の国家の在り方の変更を迫る大胆なものです。これは、途上国をグローバルな市場経済に組み込むために、障害となる国家自体を無くしてしまおうというもので、国家は「安全保障と法と秩序」に関する機能のみを残して、教育、開発、その他のサービスは全て民間の市場原理に任せてしまおうというものです。今回、世銀では、国家改造プログラムとして、行政機関の民営化と司法・警察・軍隊までもをセットとして提案しようとしています。世銀が債務危機に見舞われた政府に対し、債務返済のために構造調整政策（SAP）を一方向的に導入して15年になりますが、貧富の拡大と環境破壊が深刻化する現実を前にして、多くの批判がなされ、それを阻止することが途上国の人々の闘争の大きな課題となっていました。今回の国家改造プログラムは、そうした人々の闘い自体をも、国家の機構を変えてしまうことで壊滅させてしまう極めて危険なものです。

こうしたグローバリズムの流れは、単に第三世界の国々だけを強制するものではなく、日本など第一世界の国々の政策や国家機構の変更をも迫っているのです。日本に対しては、昨年12月、経済協力開発機構（OECD）は、96年版「対日審査報告」を発表し、その中で中央と地方の財政赤字（442兆円）が国内総生産（GDP）の7%に達していることを理由に、特別減税の廃止、所得税の10%実現を迫っています。

かつては最高の福祉国家と言われたニュージーランドでは、英国のEC加盟による経済的打撃や金融の



自由化の荒波に翻弄され、財政赤字が拡大、84年以降、行革を断行しました。地方分権化と併せて、可能な限りの地方業務が企業化、民営化され、国有財産の売却、民営化が進められました。85年以前には、最高所得税は68%だったのを、33%に低減させ、12.5%の消費税（GTS）が導入され、低所得者層に大打撃を与えました。また年金受給資格を60才から65才に引き上げ、退職時平均賃金の80%支給を65~72%に引き下げ、88年以前には無料だった大学・専門学校の授業料が有料化になりました。労働市場は完全に自由化され、労使関係は一変しました。労働契約は、個々の契約に基づき、資本が一方向的な変更権を持ち、ストライキも制限され、労働者は非常に厳しい労働条件の下で働かざるを得なくなっています。こうした行革の嵐は、それまでであった少数民族や社会的弱者の尊厳を尊ぶ社会制度や価値観、文化を荒廃させるという極めて深刻な問題をも生みだし始めています。

### 地域から国の在り方を問い直す時代

いま、世界は、国境を越えた資本の流れが国家主権の力を弱めていけば行くほど、地域としての人々の力の結集が強められる条件にあります。そして、いま世界の各地で、グローバリズムの画一的な統合に対する多様な価値や形態を持った人々の暮らしや平和、文化の意義が問い直され始めています。そして、様々な闘いも始まっています。ドイツやフランス、カナダ、韓国などでは新自由主義の国家政策に反対する労働者の闘いが大きな拡がりを持ち始めています。また一方で、そうした国家再編の矛盾を最も受けざるを得ない地域から、公正な民主主義、主権を要求する運動が、生まれてきています。その典型は、NAFTAの支配に反乱を開始したメキシコ・チアパスや米軍基地の縮小・撤去を求める沖縄の闘いです。その共通するものは、グローバリズムの作り出した世界秩序の中で、その国の最も矛盾の集積した地域からの反乱です。それは先住民や県民の主権を持つての闘いですが、共に分離独立を求めているわけではなく、国家や世界に対して公正な民主主義の実行を求めているという点で極めて教訓的です。チアパスや沖縄だけでなく、いま世界の各地でこうした闘いが生まれる可能性があり、現に生まれているという事が出来ます。

地域から国家の在り方を問い直し、世界を変えていく闘いが、住民主権を求める闘いとして、同時代的に生まれているという事は、「国と地域がせめぎ合う時代」に日本ばかりでなく、世界自体が突入していることを明らかにしています。時代が歴史の転換点として、グローバリズムの支配に対抗する住民自治・住民主権を求める闘いを生み出し始めているのです。私達がめざす平和・自治・共生の方向も、こうした時代の闘いの一環として位置づけていくことが重要です。世界各国の住民や労働

者の闘いを、単に一つの地域の闘いとして孤立させるのではなく、同時代の、同じ問題を抱えた闘いとして位置づけ、学び、共同して人々の力を発展させ、私達の地域の中に結びつけていくことが問われているのです。

### 人々を守り、平等と公正を実現する 経済民主化の政策を！

私たちは、橋本行革に対しては、資本の自由化による弱肉強食の原理に反対し、人々の暮らしや生命を守り、平等と公正を実現するような経済の民主化のための政策を要求します。例えば、金融についていえば、銀行・金融機関の情報公開、倒産に対する預金者保護政策、社会保障の充実、行革であれば、行政情報公開、国民の生活を守るための省庁改革、特に生活の安全と労働者の権利擁護を。そして環境保護の観点に立つ規制を求めます。地方分権に関しては、財源確保や地域の平和、安全の自決権も含めて、その徹底を求めます。

こうした政策を真に人々のものとし、住民主権として行使できるようにするためには、人々が自らを主権者として組織し、地域における民主化を実現していくことが不可欠です。これなしには、こうした政策も単なる中央省庁の合理化としての行革に終わってしまいます。

私たち=地域の住民は単なる消費者ではなく、主権者でもあり、同時に公務員、教師を含む労働者・農民を含む生産者でもあるといった三つの力を持った有利な存在です。私たちは、この三つの力の一つのものとして、橋本行革がもくろむ資本の自由競争システムに対して、地域から私たちの暮らしや権利を守る運動を組織化していきます。米国では、従来の大労組が労働者の権利を守れなくなり、新しい労働者の権利を擁護しようとする、地域の人々による草の根の運動が活発になってきています。その運動は単に労働者の権利擁護にとどまらず、地域の生活自体を守る運動としての質を持ち初めています。この状況は日本でも全く同じであり、労働と平和や環境、福祉など他の領域の運動とも連携し合い、社会的な拡がりを持つ地域ユニオンなどのような幅広い地域センター的存在がますます重要になりつつあります。

橋本行革に対峙する地域の闘いとは、こうした社会総体の在り方を人々と共に地域に作っていく闘いであり、それと同時に、そうした地域における政策要求や運動の経験を互いに学習し、地域間格差の問題を克服できる地域の連携を作っていくことです。

希望21は、こうした質を持つ地域の運動の実現を目指し、今年も、がんばります！

# 人と出会う

吉田信吾（希望21・京都）

小学校の頃、クラスにはいつも一人か二人は障害者がいた。それが身体的なものであり、「知恵遅れ」といわれるようなものであったり、色々なパターンだったけど。

1960年代、街にはまだ「傷痍軍人」と言われた人の姿も結構存在していた時代のことだ。僕が高校まですごしてきた横浜というところでは、同和教育というものはなかったから、障害者などの被差別の人達のことを学校で学んだ記憶はない。けれど、障害者がクラスや地域にいるのはあたりまえの風景だった。

じゃ、「差別は無かったのか」といえば、そんなことはない。僕自身、喘息持ちで虚弱児として学校の中にいたものだから、結構いやな目にもあった。ただ、同級生にとりより教師～学校によって被った嫌なこと、記憶のほうに鮮明に残っている。また、逆に僕も「いじめの輪」に入ったりしていたこともあった。

子供というのは、結構素朴に差別をする。同じクラスに障害を持った子がいて、動作がスローモードだったり、勉強が出来なかったりすると、平気でからかうし、「いじめ」る。それ自体は、悪いことだ。でも、そうした言動を「大人」によって指摘される（怒られる）ことによって、前に進むことが出来ることも確かだと思ふ。

障害者との関係が鮮明に記憶に残っているのは、ちょっと耳の遠い女の子のことだ。他人の話が聞き取りにくいのだろう。会話がなかなか噛み合わない。動作もスローモードだったこともあって、しかし、身体は大きかった（だから、余計目立っただと思う）から、いじめの恰好の標的になっていた。僕自身もそうした「いじめの輪」に加わっていた。

ある時、彼女の親が学校に怒鳴り込んだ。そして、担任の教師はそれなりに説教してくれた（と、思う）。

事実を知った僕の親は、なにも聞かずに僕を殴った。一言、「情けない」と言われたのは覚え

ている。中学二年生の時のことだ。

障害者とのつきあいということで、多少なりとも考えはじめたのは、大学に入ってからだ。それも具体的に誰かと出会うというのではなく、もっと観念的なものだった。というのは、多少なりとも、部落解放運動や在日朝鮮人問題と係わっていく中で、差別の問題を考えはじめ、障害者差別というのもその中の一つで

あるから…、という位の認識だったろう。その頃、既に家の近所の一人暮らしのお婆さんの手伝いをしたり、同じく家の近くに住んでいた車椅子のお婆さんの車椅子をおしたり…ということにはしていたのが、それ以上のものでも、以下のものでもなかった。だから、何かの理由で忙しくなったりすると、それっきりという感じだった。

大学の中で耳にする障害者解放運動は、政治党派が出てきたり、健常者への「つきつけ」みたいな感じがあって、正直、あんまりつきあいたくないなと思っていた。

そんな僕の転機となったのは、Aさんとの出会いだ。その頃の僕は、大学に来ると、とりえず、あるサークルのボックスにいた。

とある政治組織が圧倒的に強かった学内で、色々な活動をしているノンセクト（死語ですわね！）学生の唯一の溜まり場であったそのボックスは、色々な人が出入りしていたのだが、Aさんを紹介してくれた彼女もそのうちの一人だった。彼女は、それ以前にも幾度か介護の話を持ってきてくれていて、僕はその度に介護に入っていたのだが、基本的には「介護する側」「助ける側」にいたのではないかと思う。

Aさんは、森永ヒ素ミルク事件の被害者で生まれつき全身が麻痺している。その彼が、一人で九州から京都にやってくるので、京都駅まで迎えにいった欲しいというのが、彼女の話だった。

当時の僕にとって、障害者というのは、「援助が必要な人」でしかなかったから、全身麻痺の彼が、電車に乗って一人旅をするなんて想像を絶することであった。

しかし、僕は「正義の人」だったので、断る理由もないままに、約束の日時に京都駅まで迎えにいった。彼は、本当に一人で来ていた。大変な事を引き受けたのではないかと構えていた僕に対して、彼はすごくあっけらかんとしていた。

夕食時だったので、駅の食堂街で食事をし宿泊先を聞くと、「どこか知らないか？」と言う。「どこでも良い」というので、僕の下宿につれてきた。他の住人にも彼を紹介した後、歩いて数十秒の銭湯にいった。なにもかも僕としてはじめての経験だった。

その夜、彼と同じ下宿の住人と共に飲み屋にいて、遅くまで話をしていた。Tさん自身のこれまでのこと、障害者解放運動のことなんかを話してくれた。特に印象に残っているのは、「障害者解放」を言いつつ障害者を道具のように使うある政治組織についての話で、僕自身の経験からもふむふむと思っ

て聞いていた。数年が経ち、彼は京都に移り住んできた。僕自身は大学を出てから京都を離れたこともあって、彼が京都にやって来てからはそんなに頻繁なつきあいはしていなかった。

僕が京都に戻ってきたとき、彼の周りには僕の知らない人が多く介護に入っていた。

地域で自立生活をしている障害者にとって介護者不足は切実な問題としてある。Aさんにしても、介護者がいない時には、何時間もトイレに行くのを我慢していたり、時には垂れ流し状態になっていたと聞いた。

彼は良く言っていた。「『介護者』より友達が欲しい」。実際、僕はあまり良い介護者ではなかったと思う。泊まり介護の朝、持病の喘息の発作で僕自身が動けなかったことも幾度かあった。彼は、その度に「お前の方が、介護が必要だな。」と笑った。酒飲みの彼は、会うたびに体重は増えていて、非力な僕に風呂介護は困難だった。でも彼はつきあってくれた。良い介護者ではなかったけれど、友達にはなれたと思っ

た。その彼が、数年前に突然死んでしまった。自宅のトイレで倒れていたようだ。

彼の通夜、葬式にはたくさんの人達が参加した。僕が感心したのは、通夜や葬式を仕切っていたのが、彼の住んでいる団地を始めとする地域住民だったということだ。

彼は、難しい解放理論をいう人ではなかった。「健常者」に対して、一方的なつきつけをするようなことを決してなかった。だからこそ、僕は気楽につきあえたのだろう。でも、彼の思想なりといったものは、彼の生きざまに現れただろうし、介護というごく限られた時間・空間を共有する中からでも学べると思っている。

障害者とのつきあいかたというか、スタンスの取方というのは基本的にはAさんとの関係において学んだことは非常に大きいのだが、それは人との付き合いかた全体に射えることであると思ふ。

地域住民が中心になって運営されていた彼の通夜、葬式にはそうしたことがよく現れていたのではないか。

僕は、障害者問題について体系だって学習をしたことはない。しかし、実際に、現場で付き合い合っていくなかで、失敗も繰り返してきたけれど、色々なことを学んできた。

あたりまえのことだが、未知の人と出会う時、人は前もって情報を集めたりはしない。例えば、新しい地域に引っ越したときは、とりあえず、隣近所に挨拶をすることからはじめる。そして、少しずつお互いのことを知っていく中でついあいは深まっていくのだと思う。

もちろん車椅子の押し方、風呂の入れ方…、技術的な情報はあるにこしたことはない。でも、それは、あくまでも、良好な人間関係があつてこそ生きるものだと、僕は思う。

自閉症の人がやっている書店の営業を手伝っていたことがある。彼は「知的障害者」と言われる人だ。その時の感情をストレートに出すこともあるから、結構疲れることも多い。仕事は、地域の学校を回る、学校の先生相手の商売だ。はっきり言って、効率は良くない。注文をくれる人にとっても、街の書店とつきあっていた方が、便利なことも多いだろうと思う。

でも、彼がそうして地域の中で生活し仕事を続けることで、そこでは確かなになにかが変わるのだろう。小学校に登場する彼に、こどもたちは興味を示す。彼は、素朴に子供たちに手を出そうとする。そこには明らかに違和感が生じる。

しかし、繰り返されることで、違和感が違和感でなくなり、「当たり前」のこととなる。そうした過程が地域を少しずつ変えていくのだろうと思う。

昨年春より、僕は老人福祉の仕事始めた。僕自身にとっても新たな「違和感」と、新たな「当たり前」と出会うことが出来るだろうと思っ

ている。さて、「希望21」は地域でなにと出会うだろうか？



# STREET MEDIA CLIP

## ～年頭LIVE REPORT

avex旋風が吹き荒れた96年は、原宿歩行者天国の一方的な中止宣告で始まり、ストリートカルチャーにとっては、キビシーな年と思わなくもない一年だった気がする。

“YEN TOWN BAND”は確かにクオリティー高いが、やっぱSONYなのね、と思わずにはいられなかった。おそらくボクの知らないところで、スグー面白いことがあるんだろうけど、内田有紀のプリンターのCMよろしく「なんだかなあ」と思っているのはボクだけじゃないだろう。「グチはオヤジの始まり」とよく言うのか分からないが、ローな気分は旧年にさて置き、希望に満ちた97年を送るために、新年早々、LIVEに2本足を運びましたんでレポートしまーす。

12.31.～1.1.

### アフリカン・ニューイヤー・フェスティバル

安室奈美恵がレコード大賞、Puffyが新人賞を獲得、松たかこが紅白の司会をしていた96年大晦日、新宿シアターモリーエールはごったがえしていた。年越しイベント数あれど、ここを選らんだのは正解だった。「国境を越えて、年を越える」のサブタイトルに違和感がないほどに東京とアフリカがMIXされた空間がそこにあった。仕掛けたのは、メディアを通して人の出会い、つながり、共に創造する場をコーディネートする新しい事業体を目指すメディアガレージ。出演は、アフリカの土着的な文化の要素を活かしつつ、ポップスファンにも心地よいサウンドを提供するMAMUなど。会場には、アフリカ料理の香りが立ち込め、ちょっと柑橘系のビールを口にしながらいい気分になってゆく。内容は、フィルムあり、トークあり、ダンスあり、パーカッションあり、バンドあり。トークセッションでは、ざっくばらんながら在日外国人の目から見た日本への問題提起がされていく。カウントダウン近くからのパーカッションセッション。BBモフランのワークショップに参加した「生徒」たちも加わり、パフォーマーとオーディエンスの「境界」も年と一緒に越えていったように感じた。午前3時も回

り、MAMUのステージでテンションのあがった会場の中では“A HAPPY NEW YEAR”の挨拶が決してむなしくはないと思った。外の寒気で汗は冷えても、その“HAPPY”は凍えないようにしたい。



### 1.11.革命的歌声運動・長征GIG

ボクは、FUNKという言葉以前 FUNXというBANDに出会っていたかもしれない。「甘くて酸っぱいコココーラ」、アメリカの「自由」市場主義経済を適確に批判している、とボクは思っているその代表曲を15年ぐらい前に、田島ヶ原のフリーコンサートで聞いたのを覚えている。そのFUNXの中心メンバーである大沼栄氏と再び出会う事になったのは、新宿の西口だった。彼は、路上生活者や外国人労働者の連帯や自衛隊の海外派兵への反対運動に熱心に取組んでいた。しかし彼は常にロッカーである。その大沼氏が社会や運動の中の矛盾も自分の中に抱えつつ、東京を離れることになったのである。共に活動してきた仲間とのしばしの別れに当たっての宴という意味も込めつつ、この日のイベントが開

催された。会場は、恵比寿のA&A。小劇場とライブハウス双方の機能を持つ、初めての会場ながら自分たちにとっては馴染みやすいスペースだ。リハーサルから立ち会ったボクを驚かせるのは、大沼氏の本気さである。「リハからそんなに絶唱していいの？」と思わずにはいけないほどに彼は力を抜かない。しかも本ステージ約3時間の間たくさんのユニットが登場するが大沼氏はほぼ出ずっぱりなのである。その全てで、彼は全力で叫ぶ。ポーズではない。

「これでも俺らは人間だー」という叫び、東京都政をつかさどる側に向けての「おらそれでも人間かー」との叫び、痙攣しながらのその叫びはステージだけではない彼の活動の全てを凝縮した表現であると感じた。ストラングラーズのカバーもあるDST、70年代後半から80年代に掛けてのストリートの匂いを全くかびさせずに感じさせるFUNXなど。仲間のユニットも彼の

本気さに昂ぶらされたかのようにテンション高いパフォーマンスを展開した。ラストのボブマレーの名曲“NO WOMAN, NO CRY”を歌い終えた彼にオーディエンスからの拍手はなかなか鳴り止まなかった。

そんなこんなで、相変わらずの腐敗政治が横行はしているが、人々の力で変えていけないことはない、感じる事の出来るLIVEに2本も出会えたボクは、今年は“PUNX NOT\* DEAD”とか“KEEP ON R&R”ということを実際の言葉としてもう一度発していければいいな、と思っている。

by 菅原 “ニョキ”和之 from  
『未来はみんなで作る隊』

# STREET MEDIA CLIP

## 年頭LIVE REPORT

# 大阪だより

昨年12月15日、希望関西懇談会が大阪でもたれ、高槻市議の脇田さんから記念講演を受けました。脇田さんは北摂という地域で長年、生協や医療、福祉などの地域活動を通じてこられました。講演ではそのルーツとなった人との出会い、特に朝鮮戦争当時の反戦活動において、若き共産党員として非合法の武装闘争も辞さず闘い、和歌山の山中においては「山村工作隊」として活動したときの実情や、その後の共産党からのパージと歴史からの抹殺という挫折と苦闘などが語られました。

参加者にとっては、ほとんどが初めて聞く話で、戦後日本の闘いの歴史の中で闇に塗り込められた部分の深さと重さをあらためて認識させられました。そして、そこから未来に繋がる希望を、私たちはつかんでいこうという想いを強く感じました。

講演を受けた後、それぞれの感想を述べ合い、今年夏の尼崎選挙の取り組みを話し合っ一部を終了。会場を移して、仲間たちとの懇親を深める忘年会へ。97年を「地域から国を変えていく年にしよう！」と気持ちを新たにスタートを切りました。

戸田 (希望21大阪)



(脇田さんのお話は、近々にもインタビューとして、ご紹介する予定です。)

## 編集後記

阪神大震災から2年経ってしまいました。仮設住宅に住んでいる人たちは、もうじき出て行かなくてはいけないとか聞きました。倒壊した約140棟のマンションのうち建て替えや補修の終わったのはたった2棟しかないそうです。建て替えるのに何百万円も負担しなければいけなかったらなかなか合意できないのも当然。

個人個人で災害から立ち直るのは、並大抵のことではありません。政府は個人補償については口をつぐんだままで消費税を上げる、社会保障はどんどん切り捨てる。いったい私たちの暮らしはどうなるの！

ここは『希望の21世紀』のパンフレットを持って地道に仲間を増やしていくしかないか。

♪これが私(達)の生きる道♪  
なんちゃって。(チカコ)

**★新版『希望の21世紀』のパンフレットができました。定価300円です。購入希望の方は下記にご連絡下さい。**

## 希望の21世紀宣言

私たちは、現在のモノ中心の社会を、人間が人間らしく生きることのできる社会へとつくり変えていくことをめざします。

人間らしい社会一人と人とが平等に、ともに助け合って、人間が自然の一部として本来の姿で生きることのできる社会一を実現することこそが、人々の希望です。私たちはそのために、あらゆる領域で民主主義を徹底し、民主主義をはばむものに対してたたかいます。

私たちは、世界に戦争と大国主義の不平等をもたらす憲法改悪を許しません。9条の理念の実態を日本から作っていくことによって世界の平和と民主主義の実現に貢献していきます。国と国とは対等平等の関係にあり、人間らしく生きることの豊かさの尺度に、人々のあり方を人々が決め、どこの誰も本当に武力を必要としない国際社会の実現こそが、平和の実現です。

私たちは、地域からの国の進路、世界のあり方を決定する政治的な力を作っていきます。そのために、私たちの意志、知恵や力を結集し、たがいの経験に学び合い、信頼を築き合いながら、自治の実現をめざします。何かに頼ることなく広範な人々とともに変革の力を作り、その統一を推進することを自らの役割とします。

世界の現実を変えること—それは私たち自身のあり方、運動のあり方を変えることなくしては実現できません。私たちは自らを変えあう中で現実を変革していきます。本音を出し合い、あらゆる困難をともに克服し、成功や喜びを、そして失敗や悲しみをも共有し、助け合ってたたかいの輪を広げ、その中に新しい社会を準備していきます。

人間らしい社会の実現をめざし、世界の平和と民主主義を求め人々とともに、希望に実現に向けて進みます。

1部200円 定期購読をよろしくお願いします!年間購読料3000円(送料込み)

郵便振替: 00100-1-97125 『希望の21世紀』

希望

21

century

月刊『希望の21世紀』●創刊16号●1997年1月18日

発行●「希望の21世紀」全国委員会 編集●希望三多摩

連絡先●希望21・三多摩

東京都日野市多摩平6-20公住219-5 三浦方 TEL&FAX 0425-82-2407

●希望21・京都

京都府京都市中京区丸太町通柳馬場西入る鍵屋町75東洋ビル3FCOM京都気付  
TEL 075-212-2455 FAX 075-212-2456

●希望21・未来はみんなで作る隊

東京都杉並区高円寺南2-39-15 光荘203 菅原方

TEL 03-3314-1505 FAX03-3223-0468

●希望21・神戸

兵庫県神戸市灘区森後町2-1-7 斎原ビル302

TEL&FAX 078-843-7626

●希望21・大島

東京都大島町元町字小清水273尾形方 TEL&FAX 04992-2-4708

●希望・大阪

大阪府守口市外島町6西1-1709井本方 TEL&FAX 06-997-2062